

【作文】

中学生の部

「境界線のない世界」

双葉中学校 三年 前川 斐奈子

私は右耳が聞こえない。三歳の頃にムンプス難聴で失聴した。

失聴したのが幼い頃で、両耳が聞こえていた時のことなんて覚えていないし、私にとっては今までもこれからも、片耳で生活していくのが普通で、周りにも隠していない。

小学校入学から九年間、毎年最初の授業で先生から新たなクラスメイトに、右耳が聞こえないことを伝えてもらっていた。みんなそれを受け入れてくれて、いつも左側から話しかけてくれる。

中学三年生。今年も最初の授業で耳のことを伝えてもらった。いつもなら、もうそんな時期か、くらいに思っていたけれど、今年は違った。なぜなら、自分がみんなと違うということを改めて感じたからだ。

ある日の授業中、どこからか教科書が落ちる音がした。私は「どこからだろう」と周りを見回した。キョロキョロ首を振っているのは私だけだった。

「みんな音のする方向が分かるんや。」

私は急に寂しくなった。それと同時に不安でいっぱいになった。今、私は「子ども」であり、配慮され、守られる立場だ。しかし、これから先、社会に出てからはどうだろうか。誰がどう、何を配慮してくれるのか。私は何かないか探してみることにした。

学校から帰宅し、ネットで「片耳難聴」と検索してみた。すると、

「クロス補聴器」と出てきた。クロス補聴器とは、両耳に補聴器を着け、聞こえない耳の方で拾った音を、聞こえる方に転送して三百六十度の音を聞くことができるものだ。私はこのクロス補聴器の存在を知って、少し嬉しくなった。それから私はクロス補聴器について詳しく調べた。とにかく値段が高い。保険が利かず、何十万もする。到底、私のお小遣いでどうにかなるものではない。行政から補助金が出るのではないかと考え、調べた。「身体障害者手帳に記載されている障がい」の部位や程度が交付基準に該当し、補装具の交付または修理が必要な方。」対象になる方として、そう書かれていた。私は身体障害者手帳を持っていない。条件を満たしていないからだ。

私の心は揺れ動いている。「障がい」とは何なのか。近年は外見からは分かりにくい障がいなどがある人が周囲から援助を受けやすいように作成された、「ヘルプマーク」というものもあるそうだ。実際、私も少なからず生きにくさを感じている。何が「障がい」で何が「障がい」ではないのか。私は一体何なのか。

私は私だ。誰だって「個」は「個」だ。分け隔てのない社会を望む。私は右耳が聞こえない。これから先も隠すつもりはない。それが私だからだ。これから関わっていく人には理解してもらいたい。「障がい者だから、障がい者じゃないから」ではなく、みんな生きづらさを感じて苦しんでいる。それに気付いたとき、互いに尊重し、助け合える、理解し合える社会であって欲しい。それは、これからの未来を担う私たち次第だ。

【作文】

中学生の部

「歴史の学びと私の葛藤」

米原中学校 三年 角田 エリン

私の父はアメリカ人で、母は日本人です。私は、父の仕事の都合で約十年間香港で育ちました。小学校六年生の時に、日本へ引越しました。

最近、三年生の一学期の授業で、第二次世界大戦、特に、太平洋戦争について学習する機会が多くなりました。太平洋戦争では、日本とアメリカは互い敵国で、私のアイデンティティである二つの母国が戦火を交じて激しく戦い合い、多くの犠牲者を出しながら終戦に至った事実や詳しい戦争の様子などを授業で学び、私はとても複雑な思いをしたり、犠牲者に対して申し訳ない気持ちになったりしました。また、少し罪悪感も感じました。

歴史の授業で戦争を学ぶ際、「戦争の原因は特定の国のせいでもなく、当時の人々の考え方が原因である。」と先生がおっしゃいました。私はその言葉を聞き、少し安心し、救われた気持ちになりました。私は戦争の授業を受けるたびに、クラスメイトや先生に、アメリカの事を悪く言われたらどうしようとか、アメリカを批判する発言があったらどうしようなどの不安が強く、特に太平洋戦争を学ぶ授業には出たくない気持ちも湧いてきました。

私の弟は小学校四年生で、三年生の時の国語の授業で、「ちいちゃんのかげおくり」という太平洋戦争時のアメリカ軍による空襲による犠牲になった小さな女の子の話を読んだ際、数人のクラスメイト

から、「アメリカ最悪」というような批判的な言葉を聞いて、ショックを受け、心が痛んだそうです。その時に、担任の先生の、「どの国のせいでもないからそのような事を言うべきではないよ。」という言葉聞いて、弟は安心した気持ちになったそうです。

また、私の母は昔、アメリカの大学に通っていました。必須科目であるアメリカの歴史の授業を受けていた際に、大学の歴史の教授から広島・長崎に投下された原爆を肯定する発言があり、原爆を投下したおかげで太平洋戦争が終戦を迎えたと言っていたそうです。それを聞いた母は、きずついたそうです。戦争に対する価値感は何れぞれ違う意見があり、さまざまな考え方があることは、理解できますが、多くの犠牲者を生んだ原爆投下のことを肯定する発言をはじめて聞き、複雑な気持ちになったそうです。アメリカと日本は当時敵国で、戦争に対する考え方はアメリカと日本、それぞれ違い、両国それぞれの理由やキッカケがあり、それが開戦につながっていたと母は話していました。

私は今年、中学生の修学旅行で沖縄へ行きました。現地で平和講演に参加し、被爆者から戦争の体験談を聞く機会がありました。太平洋戦争時の沖縄戦での出来事や心情などを聞き、当時の残酷な状況を知り、とても心を痛めました。私の大好きな二つの母国が戦い合い、お互いに多くの犠牲者を出し、戦った事実を学び、悲しくなりました。

また、修学旅行中に糸数壕というガマと呼ばれる防空壕として使われた洞窟を訪れました。ガマに入った途端、空気が一変し、たくさ

んの方がこの場で無念に亡くなっていったことを知り、戦争の残酷さを改めて感じとても悲しくなりました。

戦争中は、アメリカ人と日本人は友人になるどころか、結婚も許されていなかったらしいので、戦争が終わって、日本とアメリカが、良い国際関係を築き、現在は結婚も自由にできるようになったので、私の父と母は結婚できて、私や弟が生まれてこれてよかったと思います。現在はアメリカと日本が終戦に至り、両国で協力し合う良い国際パートナーの関係を築けているのでよかったと思います。

とても悲しい事に、人類の歴史上で戦争はくり返されて、多くの犠牲者を生み出してきました。戦争からもたらされることで良いことは一つもありません。第二次世界大戦や太平洋戦争を授業で学んだときに、私の中には色々な葛藤があったけれども、戦争の状況を学べて、同じ過ちをくり返さず平和な未来につなげていきたいという希望に変わりました。私たちの時代は、戦火を交えて戦い合うことのない平和な世界にしていきたいです。

【作文】

中学生の部

「多様性と大切な自分」

大東中学校 二年 田中 結乃

「COLORFUL◎」。二年A組の学級目標だ。一人ひとりの個性やいろいろな気持ちを大切にしていこうという想いが込められている。色にはいろんな色があつて、どれもきれいな色だ。絵の具のインクのように、そのままでも、混ざりあつても、一緒に並んでもきれいな個性、色を打ち消したり否定したりするのではなく、受けとめたり認め合ったりできるといいなと思う。また、自分の色も仲間の色も大切にして、いろんな色が輝くように、いろんな色をみつけていきたい。「あの子はいいな、すごいな、うらやましいな。」「それに比べて自分は○○だし、自分なんてできっこないな」と下げてしまうときもある。そんなちよつとダークな感情もカラフルな自分のひとつの色。自分の中にもいろんな色がある。単色じゃない。明るい色もダークな色もある。いろんな自分やいろんな気持ちがあつていい。みんなそうだ。

そういえば、先日「色えんぴつのうすだいい色って前は肌色やつたんやんなー？」と弟が言っていた。「うすだいい色って長いしちよつと言にくいな。」と話していた。そのときは「ほんまやなあ」くらいにしか思わなかったけど、肌の色は人それぞれがう。私も部活動で日焼けして黒くなったし。調べてみたら、二〇〇〇年から肌色からうすだいい色に変更されたようだ。思ったよりも昔で、自分が生まれる前の出来事でちよつと驚いた。私は幼い頃、うすだ

だいい色のことを肌色と言っていた。これが人の肌の色と認識していた幼い私。ある日、オリンピックのさまざまな国の人が映っている場面を見た。そのとき、父が「世界にはいろいろな国の人がいて、肌の色もいろいろなんだよ。いろいろあつてすてきやろ。」と教えてくれた。「へえそうなんや！」と、私は少し世界のことについて知れて嬉しかったのを覚えてる。だから、色の呼び名が変わったことは、○○はこうだ！みたいなものが、一つ変化したようにも感じる。いいじゃん、前向きで。

「いいな『じぶん』-What a wonderful me-」という絵本を読んだ。一人ひとり「じぶん」は「じぶん」で、世界にひとりきりの大切な「じぶん」。だから私も大切に、家族も大切に。友達も先生もまだ出会っていない知らない誰かもみんな大切。何気ない日々の暮らしの中に、笑顔と一緒に「いいな自分！」があふれたら、身近な人にも「いいね！」ともつともつと仲良く過こしていける気がする。「いいな自分！」と思えるときや、「いいね！」がたくさんあるといいな。戦争やさまざまな差別、いじめ、誹謗中傷：いろんな悲しいことが世界中。日本の、身近なところでも起こっている。だからこそ、たった一人の自分と向き合い、自分を大事にしたり、友達や家族などすぐ側にいる人を大切に想ったり守ったりすることを忘れたくない。ちがいを「なんで？なんで？」と排除するよりも、「そうなんや。」と受け止め知っていくこと。「いいな」自分。「いいね」あなた。そんな世界は、カラフルになつていくと思う。いろんな人がいて、考え方やもの見方があるのは、なんだか自由さを感じる。いろんな思いが

ある中で、「いいな自分」をみんなが笑って過ごす日々が広がって、
平和になりますように。それが多様性がある世界なんだと思う。